

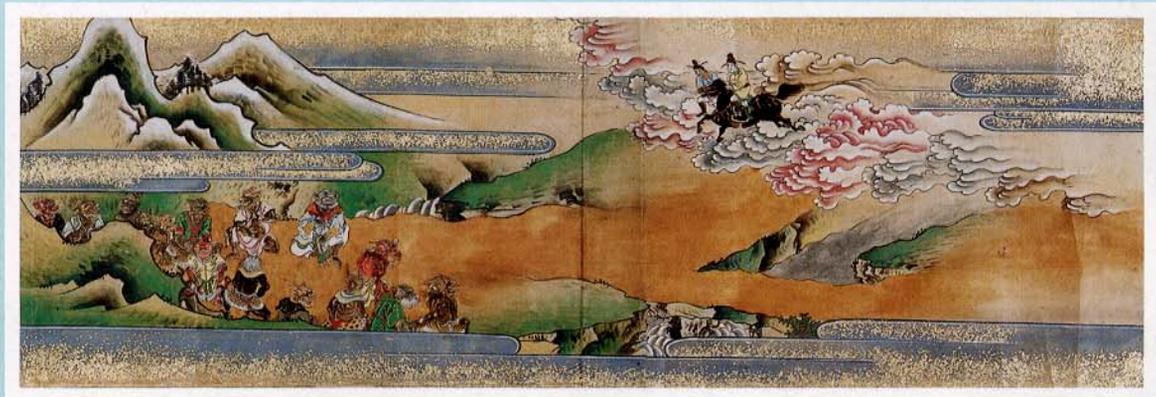
一宮市 博物館 だより

もくじ

展覧会のご案内

- 企画展「お釈迦さまのものがたり」…………… 2
- 企画展「茶の湯の浸透」…………… 3
- 博物館アルバム(平成20年度)…………… 4
- 文化財保護事業…………… 6
- 民俗探訪11…………… 7
- 平成21年度催し物のご案内…………… 8

No.44 2009.3



《しゃかほん地(釈迦の本地)》全3巻のうち中巻第3図(江戸時代前期 西尾市岩瀬文庫蔵)

仏教を開いた釈尊(お釈迦さま)の伝記を描いた豪華な絵巻。文章部分は、仏伝経典を元にして室町時代に成立し刊本としても流布した物語『釈迦の本地』である。

上に掲げた図は、後の釈尊である悉達太子が出家し、愛馬・金泥駒に跨り、車匿舎人をお供に連れて檀特山の仙人の元に向かう場面。金泥駒は雲を駆ける異能を持った霊馬であり、図では赤と青の瑞雲の上を駆ける姿が描かれている。画面左方の雪を被った檀特山の麓には、太子の

出家を邪魔しようとする待ち受ける外道たちがいる。

絵巻は江戸時代中期頃まで盛んに作られたが、江戸時代の絵巻の筆者や絵師はほとんど知られていない。おそらく土佐派や狩野派の流れにある絵師や市井の町絵師たちの作になるものだろうと考えられている。この作品のように、寺院や経典を離れて人々に受容される仏伝もあり、これも「お釈迦さまのものがたり」のかたちのひとつといえるだろう。

(企画展「お釈迦さまのものがたり」より)

お釈迦さまのものがたり

～ 涅槃図から読本・草双紙まで～

平成2年 4月25日(土)～ 5月31日(日)



仮名草子の素朴な挿絵

『釈迦八相物語』8巻 8冊 寛文6年(1666)刊

東海学園大学図書館哲誠文庫蔵

絵入りの版本として出版された『釈迦八相物語』は、江戸時代のロングセラーのひとつです。挿絵はシンプルな木版画ですが、こんなに小さくてもちゃんと涅槃図になっています。



三世豊国が描く涙の別れ

『釈迦八相倭文庫』58編 116冊

天保16年～明治4年(1845～71)刊 名古屋市蓬左文庫蔵

絵と文章で語られる草双紙。表紙や挿絵を描いたのは、武者絵で有名な浮世絵師・三世歌川豊国からです。白馬に乗って出家する悉達太子とその妻・耶輸陀羅の別れの場面も当世風の風俗で描かれています。

飛鳥時代の仏教伝来より約二五〇〇年が経ち、普段は意識しないながらも、仏教文化は日本の生活のあちこちに浸透しています。その中でも、仏教の開祖である釈尊(お釈迦さま)の一生を語る物語は、インド、中国を経て地域や時代によってさまざまに変化しながら現代まで伝わっています。これほど長く、広く語り継がれている物語は他に類を見ず、またその時々々の絵画や文学などの芸術の源泉となってきました。本展覧会では、市指定文化財の涅槃図三点に加え、尾張地方に伝わった涅槃図や江戸時代の絵巻・版本を展示し、ある時は超人的な神として、ある時は悩めるひとりの人間として語られてきたお釈迦さまのものがたりを紹介します。

【展示構成】

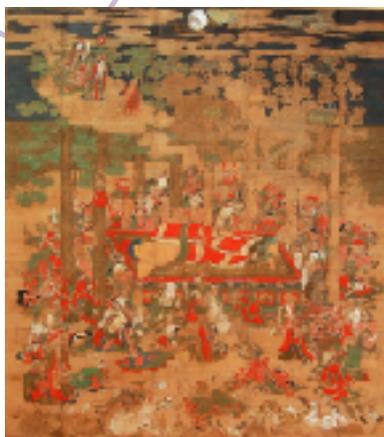
第1部 仏伝文学の発展

江戸時代には出版文化の隆盛に伴って、大衆的な仏伝文学が発生してきました。ここではお釈迦さまの生涯を紹介しながら、絵巻や版本の挿絵などを通してその変化を概観します。

第2部 涅槃図の世界

二月十五日の涅槃会に用いられる涅槃図は、豊かな仏教説話に基づく仏画です。ここでは、一宮市指定文化財三点を含む、尾張地方に伝わる鎌倉時代から江戸時代の涅槃図を展示します。(成河端)

修復なった
2点の涅槃図



《仏涅槃図》鎌倉時代
一宮市本町通・地蔵寺蔵



《仏涅槃図》鎌倉時代
一宮市大江・福寿院蔵

平成19・20年度の2か年をかけて、一宮市指定文化財の涅槃図2点が修復されました。博物館での公開は平成2年度「一宮の文化財」展以来19年ぶり、修復後は初の展示となります。生まれ変わった姿をぜひご覧ください。

Information

【休館日】

4月27日(月)・30日(木)・5月7日(木)・11日(月)・18日(月)・25日(月)

イベント

講演会「日本文化における涅槃図・仏伝図の意義」

【講師】渡邊里志氏(東海学園大学准教授)

【日時】5月10日(日)午後4時30分から3時

【場所】博物館講座室

【定員】100名(先着順)

【申込】当日正午より整理券を配布

【内容】釈迦のさまざまな姿を表した涅槃図・仏伝図は、日本文化のなかで重要な役割を果たしてきました。涅槃図・仏伝図と仏教儀式(涅槃会・仏生会)との関わりをふり振り返りながら、私たちにとっての涅槃図・仏伝図の意義を考えてみたいと思います。

企画展

茶の湯の浸透

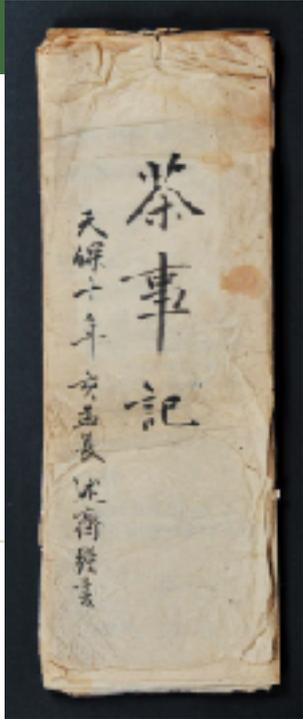
茶進上仕りたく

平成2年6月20日(土)~7月26日(日)

来ル十日正午時刻、
麩茶進上仕度、
勿論何二御風情も無御座候へとも、
何卒御親子御三方様御遊来被成下置候

これは江戸時代後期の弘化三年(一八四六)十一月に出された茶会案内状の節です。茶会を催したのは、村のお寺の僧侶、お客として誘われたのは、同じ村に住む庄屋でした。

江戸時代後期、尾張では茶の湯が流行しました。茶の湯は、名古屋城下町に住む武士や町人ばかりでなく、村に住む農民にまで浸透していきます。村での茶の湯は、庄屋層を中心に展開されました。彼らが所持する茶道具の中には、尾張藩主や藩士などが焼いた品や尾張藩の御数寄屋頭が書付をした品もありました。これらをコーディネートして、彼らは茶会を催しました。



茶事記 (個人蔵)



戸山焼茶碗 銘弁天(個人蔵)



(右)箱蓋表書「戸山やき」
(左)箱蓋裏書「弁天ト唱 知止齋 造之」

一方、宇治は抹茶の生産地でした。茶壺道中で知られる將軍家への茶詰は、宇治の茶師によって行われていました。尾張徳川家でも將軍家と同様に宇治茶師によつて、茶詰が行われ、宇治から抹茶がもたらされてきました。

本展覧会では、江戸時代後期に村で展開された茶の湯を通して、当時の人々の豊かな趣味の世界を紹介すると共に、宇治茶師による御用茶詰や抹茶生産についても紹介します。
(坪内淳仁)



雑略記 (個人蔵)

企画展
一宮二八市のにぎわい
▼10月11日～11月24日



真清田神社の門前で開かれていた三八市は江戸時代の中期に始まり、昭和時代の初期頃まで行われていました。二〇〇余年続いた三八市は、その規模を拡大しながら、多くの商人や買い物客で賑わっていたようです。本展覧会では、三八市やそこに集った商品の流通・生産、また、一宮周辺の村々で開催されていた市場も含めて江戸時代の古文書や絵地図を中心で紹介しました。観覧者の方々は史料から読み取れる、身分的には農民ながら活発な商業活動や商品作物を生産する当時の人々に感心していました。



(左)三八茶屋、(上)尾張万歳公演



会期中の催し
講演……
10/19日 『尾張の「在方町」を考える』名古屋芸術大学教授 松田憲治氏
10/26日 『「尾張」の市場覚書』愛西市教育委員会学芸員 石田泰弘氏
11/2日 『やきもの文化を語る 瀬戸物の流通』愛知県陶磁資料館副館長 仲野裕裕氏(愛知県陶磁資料館共催講演会)
11/16日 『尾張の名産と流通』日本福祉大学准教授 曲田浩和氏
公演…… 11/9日 『尾張万歳』尾張万歳保存会
イベント…『三八茶屋』(会期中の3と8のつく日に開催)

企画展
2008 一宮市現代作家美術秀選展
▼12月6日～12月21日

展覧会は第六十六回一宮市美術展の成果等をつけて、一宮市美術展での各部門の依頼出品者と市長賞受賞者ならびに各協会からの推薦者の作品をあわせて七十七点を展示いたしました。この展覧会は、今回が八回目となります。館内の特別展示室、ラウンジ、講座室、展示室四ギヤラリーで、柔らかな光と見頃を迎えた紅葉を取り込んだ落ち着いた展示室の中で三千人を越える来場者みなさんに両方を楽しんでいただきました。



企画展
くらしの道具〜今と昔〜
▼平成21年1月10日～3月1日

本展覧会は、歴史を学び始める小学生を対象に企画し、今回で十七回目となる展示です。展示構成は衣食住の資料を中心とした民俗資料展示を主軸にしています。さらに、木曾川上流山間部、知多半島・渥美半島海浜部の自然環境が異なる地域の資料と比較することにより、地域による生活道具やくらしの違いについても紹介しました。
会期中の催し
1月18日(日)「山のくらしを体験!」
2月1日(日)「海のくらしを体験!」
2月15日(日)・3月1日(日)
「平野の道具を使ってみよう!」

玉堂記念木曾川図書館・第8回川合玉堂展
玉堂の描いた動物たち
▼10月18日～11月16日

現在の一宮市木曾川町に生まれた川合玉堂(一八七三〜一九五七)は、美しい自然とそこに生きる人々や動物たちを温かい眼差しで描き、多くの名作を遺しました。本展覧会では、玉堂美術館の協力により、玉堂の描いた動物作品十七点を紹介しました。四条派、狩野派、琳派などの伝統画法を取り入れた玉堂の画境を愛らしい動物たちの姿を通して鑑賞いただける機会となりました。



公演
民俗芸能公演
▼平成21年3月22日

一宮市博物館では、これまで市内に残る民俗芸能の公演を行ってきました。今年からは先年に引き続き、市指定無形文化財の「島文楽」(昭和三十六年三月二十七日指定)と「宮後住吉踊」(平成十二年六月二十二日指定)の公演を行いました。

内容
島文楽 演目/「生写朝顔話」
宮後住吉踊 演目/手踊(五十三次・音頭・すがわき・豊年・かつぼれ・深川)

講演
尾張平野を語る13〜尾張藩と木曾川〜
▼平成21年2月15日・22日、
3月1日・8日・15日の各日曜日

これまで、本講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野、特に尾張平野について考えてきました。十三回目となる今回は、江戸時代の尾張西部と木曾川にスポットをあて、尾張藩と木曾川をめぐる政治、制度、産業などについて考えました。聴講された方々は、各先生方の講義を興味深く聞いていました。



内容
平成21年2月15日(日)
「尾張藩の成立と木曾川支配」
前東邦学園短期大学教授 原昭午氏
2月22日(日)
「尾張藩川並役所の支配について」
正眼短期大学教授 鈴木重喜氏
3月1日(日)
「木曾川舟運と商品流通」
愛知県史近世史部会特別調査委員 杉本精宏氏
3月8日(日)
「御園堤」をめぐる
岐阜聖徳学園大学教授 秋山晶則氏
3月15日(日)
「美濃から見た木曾川」
岐阜市歴史博物館学芸員 寛真理子氏



平成二十二年三月十四日、年間十回の講座をすべて終了しました。本年度は、西大海道村区有文書をテキストとして使用、講座では丹羽郡西大海道村の村絵図や宗門改帳、五人組連印帳、俵約についての讀書などを通して、古文書の解読と江戸時代の人々の暮らしや生活文化について学びました。初心者の方は、慣れないくずし字に最初は悪戦苦闘でしたが、講師の先生や二三回生の方たちとともに和気あいあいとした雰囲気の中で古文書の勉強をさせていただきました。

古文書講座

▼平成20年5月～平成21年2月

- 10月12日(日) 「木曾川の自然観察」
- 11月23日(日) 「モンキーセンター見学会」
- 2月8日(日) 「くすりの歴史を学ぶ」

主な活動



モンキーセンターでのゴリラのエサ隠し

Museum Kids Club

▼通年

市内の小学校四、六年生を対象に、歴史、民俗、考古、自然、美術などの多様な分野を総合的に学ぶ講座です。今年度後半は、「木曾川の自然観察」へ出かけるなど、外での活動が主でした。

文化財めぐり

▼11月7日



文化財めぐり(真清田神社)

市民の皆さんに、私たちの郷土の貴重な財産である文化財を紹介して、文化財愛護の精神を高めていただくために、昭和四十二年以来毎年「市民文化財めぐり」を開催しています。四十四回目の今回は、常念寺、真清田神社・神社宝物館、木曾川資料館、尾西歴史民俗資料館別館、旧林家住宅、森川家住宅、妙興寺、博物館(「一宮三八市のにぎわい」展見学)という従来からの指定文化財と併せて、近年登録された国登録有形文化財の建造物を中心にしたコースでした。

二十八名の参加者の方々は、それぞれの文化財で講師である文化財保護審議会委員らの解説を熱心に聞き入っており、秋の一日、市内の文化財への思いを新たにしていただきました。



文化財パトロール

▼平成21年1月16日

文化財防火訓練

▼平成21年1月23日



文化財パトロール(賀茂神社)



文化財パトロール(大神神社)

昭和二十四年二月二十六日に奈良・法隆寺の金堂壁画が焼失しました。以来この日を、「文化財防火デー」と定め、防災意識の高揚のため各種行事を開催し、今年度は五十五回目にあたりります。

市教育委員会は消防本部とともに二月十六日に文化財管理者宅での防火、消防設備点検をする文化財防火パトロール、二十三日には防火訓練・文化財管理者研修会を実施しました。防火訓練は賀茂神社(木曾川町玉ノ井)において賀茂神社関係者、地元自主防災会、町内会、市消防職員などの方々が中心となつて行われ、地域の市民・保育園児など多くの参加がありました。

木曾川堤(サクラ)保護活動

▼10月16日・10月25日



県立稲沢高校環境デザイン科のみなさんが、ビートモスをつめた部分をビニールで覆いさらにコモで巻く作業をしています。今後、不定根と呼ばれる新しい根が生えてくるとこの保護活動も成功と言えます。

写真2枚とも、MKC会員吉川広人君、将人君が撮影しました。



講座に参加した子どもたちが、朽ちてしまつて室になつた幹の部分に、ビートモスをつめる準備をしています。

三月の終わりに木曾川堤を毎年彩るのが、国指定名勝及び天然記念物木曾川堤(サクラ)です。これは、一宮市北方町から江南市草井に至る約九キロメートルにわたり堤防両側に植栽されたサクラの並木です。明治十八年(一八八五)に植えられたこのサクラ並木は、昭和二年(一九二七)に国指定となりました。現在では百二十歳を越えているものもあり、その衰えは目に余ります。

この度愛知県教育委員会が、一宮市大野にあるエドヒガン三本の保護を、県立稲沢高等学校環境デザイン科の協力を得て、「まもろう！育てよう！木曾川堤のサクラ」という啓発事業の二環として行いま

一宮市では文化財の管理、修理等の保存活用に要する経費の一部を一宮市文化財保護条例に基づき補助金を交付する等の保護活動をしています。ここでは、昨年度に保存修理された文化財を紹介します。



絹本着色仏涅槃図（一宮市指定文化財・地蔵寺蔵）
絹本着色釈迦涅槃図（一宮市指定文化財・福寿院蔵）

涅槃図とは釈迦がインドのクシナガラで入滅（亡くなること）した光景を描写したもので、主として釈迦が亡くなった日とされる二月十五日に執り行われる涅槃会の本尊として用いられます。

平成十九・二十年度の二ヶ年をかけて、この二幅は滋賀県大津市の株式会社坂田墨珠堂にて保存修理が行われました。保存修理として、表装は解体し、旧の裏打紙は除去をして新たな裏打をしました。彩色箇所（弱くなった部分）には剥落止めを行い、図面の汚れを除去しています。折損部分には折伏せを施し、より良い保存のため桐材にて太巻添軸、屋郎箱を新調し、台差外箱を作製しました。修理においては通常、制作当初の状態となるよう旧補修箇所を除去等しますが、今回は加筆のある補修が大きかったり、本紙料絹上に加筆されていたりなど、除去が困難であったり、除去すると図様が大きく欠失し、図柄の消失や修理前の印象と著しく異なってしまう恐れがあったため、所有者の方々と相談をして絵画情報の保存を優先する方針としました。そのため加筆の施された補修を再使用したり、加筆のある旧補修箇所を残したり等の処置としました。もちろん図様の変化が少ない無地の補修絹や色補修絹、加筆のない旧補修箇所については除去をしました。また旧補修絹で残した部分は、厚みの調整や重なり（整形）を行い、今後保存する上で不都合を生じないような措置をしました。

今回の修理で二幅とも旧軸木に修理銘などの墨書があり、そこには興味深いことが書かれていました。それによると、前回の修理の施工時期と施工者と思

われる墨書があり、地蔵寺の軸には、明治三十二年旧二月四日出来同国中郷郡一宮町御表具司長球堂貳代目野々垣重太郎行年三十二歳」と、福寿院の軸からは、明治三十八年九月中五日一之宮中町表具司長球堂時七十二才 助手重太郎三十八才」と読み取ることが出来ます。これによると前回の修復も同じような時期に同じ施工者で行われていることが判明しました。今回の修復にあたりても両寺とも示し合わせて同時期に同修復者で行うとしたわけではないので、ま



地蔵寺涅槃図修復



福寿院涅槃図修復

さにお釈迦様のお導きといえるかもしれませんが、今回の修復の際には、私自身は恐らくはこの世にはいないでしょうが、またこのような偶然が重なるようになる事を期待しています。未永く数多くの文化財

主な参考・引用文献

- 『各修理報告書』
- 一宮市教育委員会、一宮の文化財めぐり 増補改訂版、一九九九年、中野玄三編、日本の美術、六八、涅槃図、一九八八
- 名古屋博物館編、展示図録、尾張の仏教美術 涅槃図 描かれた釈迦入滅の情景、一九九七



福寿院涅槃図旧軸木部分



地蔵寺涅槃図旧軸木部分

消えゆく食文化〜ふな味噌

食生活の変化

私たちの現在の暮らしでは、スーパーマーケットやコンビニエンスストアなど、身近で便利な店舗が増加したお陰で、お金さえあれば物が手軽にいつでも手に入るようになりました。夜十時でも野菜が買える、自分で作らなくても朝四時にお弁当が買えるようになったのです。

しかし、一方で自然食や無添加という言葉が行き交い、買い物の際には産地を確認してからしか買わないという人も増えていきます。これにはさまざまな社会的事情がかわっているのですが、少しずつ昔の暮らしや食生活の良さを振り返ることの重要性が注目されるようになりました。

手間をかけること

博物館にやってくる小学校四年生に「ふ



材料のギンブナ



フナのウロコを取る



フナのハラワタを取る



水に浸してやわらかくした大豆の上に、フナをのせて水煮をする



アクを取り、2日ほど煮る



骨までやわらかくなったら、味噌と砂糖で味をつける。

北方町大日 / 豊田富子さん・豊田耕吉さんによっていただきました。

な味噌知ってる？」と聞いても、皆きょとんとしていません。見たこともなければ聞いたこともない、これが現実です。以前に紹介した箱ずしも、若い世代には伝承されていません。

特に、ふな味噌のように何日もかかるような料理で、しかも川魚がなかなか手に入らなくなった現在では、作るつにも材料であるフナが魚屋で売られていません。一九九五年一月十八日に作っていたふな味噌の材料であるフナも、木曾川で獲れたものではありませんでした。

ふな味噌は、寒フナと呼ばれる冬の寒いときに川底に沈んでいるフナを獲って作りしました。まずはウロコとハラワタを取ります。このときはフナを四半口使いましたが、大豆二口を水に浸しておき、鍋に敷いて、その上にフナをのせて水煮にします。そして、噴きこぼれたら火を弱くし、アクを取ってコトコトと煮て

いきます。一日ほどで骨までやわらかくなり、味噌と砂糖で味付けをして、また煮ます。昔はたくさん作っておいて、何日も食べ続けました。くらし展の「海のからし」で紹介する

知多半島・渥美半島の煮味噌もこれによく似ています。手間と時間のかかる面倒な料理のようですが、実は合理的なのです。

昔から学ぶこと

ふな味噌だけでなく、くらし展の催事でよく作る五目やセンバヤキも、材料は少なくて簡単にできる料理です。五目の材料は、米とゴボウとカシワと醤油と砂糖だけ。昔の料理は、今あるものを料理して食べる」といって、生きていく上での基本を教えてくださいました。これからも、このような地域色・季節感あふれる食文化を伝えていかなければと思います。(久保禎子)



奥でセンバヤキを焼いています。材料は米粉や小麦粉。粉にほんの少し砂糖を入れ、水でといてクレープのように焼きます。

炊き上がったご飯の上に、あらかじめ煮ておいたゴボウとカシワを入れます。



平成21年度催し物のご案内

詳細は市広報・ホームページ、または博物館までお問い合わせ下さい。

展覧会

企画展

お釈迦さまのものがたり

▼ 4月25日(土)～5月31日(日)

市域には数多くの涅槃図が現存し、そのなかでも古いものは鎌倉時代の制作といわれます。これらは当地域の優れた仏教文化を示すとともに、その時代のお釈迦さまのイメージを現在に伝える貴重なものです。本展覧会では、涅槃図や絵巻、版本の挿絵などを通じて、中世から近世の人々が思い描いていた、お釈迦さまの姿を紹介します。

企画展

茶の湯の浸透

▼ 6月20日(土)～7月26日(日)

江戸時代の尾張では茶の湯が盛んでした。後期には、名古屋城下の武士・町人のみならず庄屋層を中心に在村まで浸透し、盛んに茶会が催されました。そこで本展覧会では、江戸時代後期に村で行われていた茶の湯を通して、在村における文化展開の一端を紹介しま

2009 一宮美術作家展

▼ 8月29日(土)～9月13日(日)

一宮美術作家協会会員による最新の発想でイメージの試作を展開した力作(絵画・平面、彫刻・立体、デザイン、工芸)を展示します。

一宮写真協会展

▼ 9月17日(木)～9月27日(日)

感性に裏打ちされた表現力で、熱い思いを込めた写真作品を展示します。

特別展

牧進展

▼ 10月10日(土)～11月29日(日)

牧進展氏は川端龍子やうし氏に師事し、その薫陶を受け日本画家の道を歩み始めました。龍子亡き後は無所属として制作を続け、現在に至ります。日本の四季のなかで、花鳥風月や山川草木に本質を見出し、「美しい日本」がその作品に写し出されています。市内妙興寺所有の襖絵「四季生図」を中心に、さまざまな日本の美の魅力を観覧します。

企画展

2009 一宮市現代作家美術秀選展

▼ 12月5日(土)～20日(日)

二〇〇九年に開催される第六十七回一宮市美術展の成果等を受けて、一宮市美術展依頼出品者・市長賞受賞者、一宮美術作家協会・一宮書道協会・一宮写真協会推薦者の作品を展示します。

企画展

くらしの道具と今と昔

▼ 1月9日(土)～2月28日(日)

市域における衣・食・住に関する民俗資料をはじめ、木曾川上流の山間部で使われていた生活道具、知多半島・渥美半島で使われていた生活道具を展示し、自然環境の違いによる道具の比較を行います。

講座

通年講座

古文書講座

一宮市博物館保管の江戸期の庄屋文書を中心とした読解、およびその歴史的背景について学びます。

通年講座

Museum Kids Club

歴史学や民俗学、考古学、自然、美術などに興味のある子どもたちを対象に、総合的に学ぶことを目的とする活動。見学会・体験学習などさまざまな活動を盛り込み、考え方を育てます。

講座

尾張平野を語る 14

▼ 2月28日(日)・3月7日(日)・3月14日(日)

本講座では歴史のみならず自然環境や民俗文化など広い分野から講師を招いて講演会を行い、濃尾平野 特に尾張平野について考えてきました。今回は尾張で展開された本草学や洋学、国学、絵画などの学問や文化をテーマに地域の歴史の一端を明らかにします。

講座

市民文化財めぐり

▼ 11月初旬予定

市内にある文化財のうちいくつかを、文化財保護審議会委員の解説により観覧します。

公演

民俗芸能公演

▼ 3月21日(日) 13時30分より

一宮市指定無形文化財の公演を行います。

一宮市博物館だより

第44号

発行日 / 平成21年3月31日
編集・発行 / 一宮市博物館
印刷 / 大東社

利用案内

[休館日] 毎週月曜日、休日の翌日
[開館時間] 午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)
[観覧料] 常設展・聴講料含む) 一般200円(160円)
高校・大学生100円(80円) 小・中学生50円(40円)
()内は20人以上の団体料金
一宮市内小・中学生は無料
市内在住の満65歳以上で、住所・年齢の確認できる公的機関発行の証明書等を提示された方は無料
身体障害者等の手帳を持参の方(付添人1人を含む)は無料

〒491-0922 愛知県一宮市大和町妙興寺 2390
TEL0586-46-3215 FAX0586-46-3216
URL <http://www.icm-jp.com/>



[交通] 名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車南出口より徒歩7分
ここにこふれあいバス「博物館西」併設21年4月旧より下車徒歩5分